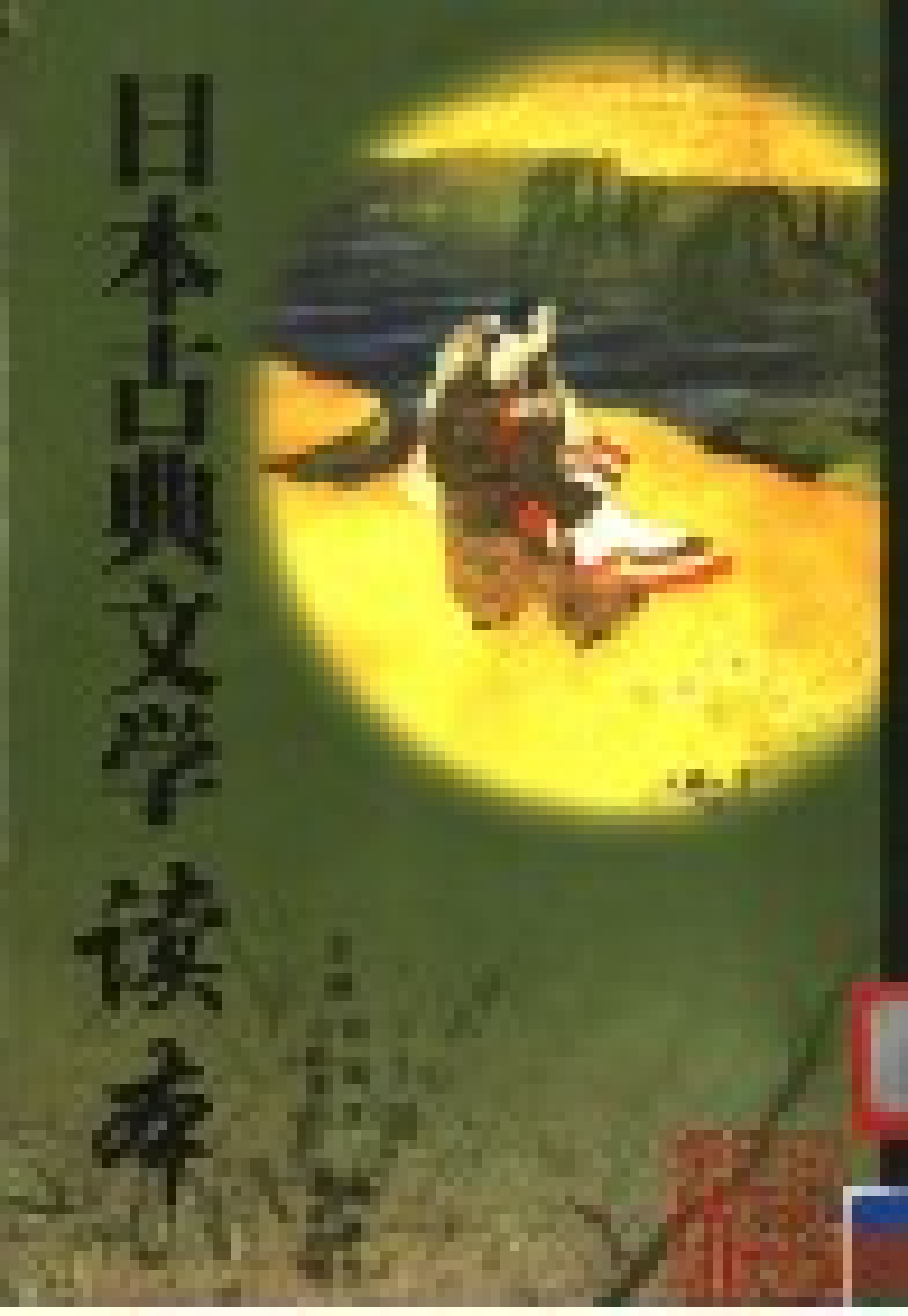
日本古典文学读本

主编 刘瑞芝 潘金生
小林保治 津本信博



日本古典文学读本

主编

刘瑞芝　潘金生

小林保治　津本信博

浙江古籍出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本古典文学读本/刘瑞芝、潘金生、小林保治、津本信博主编；卞立强等编著. —杭州：浙江古籍出版社，2002.6
ISBN 7-80518-715-0

Ⅰ.日… Ⅱ.①刘…②小…③卞… Ⅲ.①日语-高等学校-教材②古典文学-作品集-日本-日文
Ⅳ.H369.4：I

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2002）第 053864 号

日本古典文学读本　　刘瑞芝　小林保治　潘金生　津本信博　主编

出版发行　浙江古籍出版社
（杭州体育场路 347 号）
责任编辑　赵　艳
封面设计　黄静波
激光照排　杭州兴邦
印　　刷　杭州大众美术印刷厂
开　　本　850×1168　1/32
印　　张　9.25
字　　数　330 千
印　　数　0001—3150
版　　次　2002 年 7 月第 1 版第 1 次印刷
书　　号　ISBN 7—80518—715—0/I·410
定　　价　30.00 元
如发现印装质量问题，影响阅读，请与印刷厂联系调换。

日本古典文学读本

主编

中方　刘瑞芝　潘金生

日方　小林保治　津本信博

编辑委员会

中方（按拼音顺序排列）

李铭敬　刘瑞芝　潘金生　张向荣

日方（按五十音图顺序排列）

小林保治　铃木义昭　津本信博　中岛隆

松本直树

执笔者与翻译者

中方（按拼音顺序排列）

卞立强（日本创价大学）

江龙娣（上海外国语大学）

李铭敬（原山东大学　旅日学者）

刘瑞芝（浙江大学）

罗兴典（大连外国语大学）

潘金生（北京大学）

钱稻孙（已故日本文学学者）

孙力平（上海理工大学）

王东辉（山东师范大学）

修鲁彬（山东省专家局）

阎小妹（旅日学者）

杨　烈（复旦大学）

杨永良（山东师范大学）

于长敏（吉林大学）

张向荣（浙江大学）

日方（按五十音图顺序排列）

小林保治（早稻田大学教育学部）

铃木义昭（早稻田大学日本语研究教育中心）

津本信博（早稻田大学教育学部）

中岛隆（早稻田大学教育学部）

松本直树（早稻田大学教育学部）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本古典文学読本

編集

日本側　小林保治　津本信博
中国側　劉瑞芝　潘金生

編集委員会

日本側（五十音図順）
小林保治　鈴木義昭　津本信博　中嶋隆
松本直樹

中国側（中国語音順）
李銘敬　劉瑞芝　潘金生　張向栄

執筆者と翻訳者

日本側（五十音図順）
小林保治（早稲田大学教育学部）
鈴木義昭（早稲田大学日本語教育研究センター）
津本信博（早稲田大学教育学部）
中嶋隆（早稲田大学教育学部）
松本直樹（早稲田大学教育学部）

中国側（中国語音順）
卞立強（日本創価大学）
江龍娣（上海外国語大学）
李銘敬（もと山東大学）
劉瑞芝（浙江大学）
羅興典（大連外国語大学）
潘金生（北京大学）
銭稲孫（故日本文学学者）
孫力平（上海理工大学）
王東輝（山東師範大学）
修魯彬（山東専門家局）
閻小妹（在日学者）
楊　烈（復旦大学）
楊永良（山東師範大学）
于長敏（吉林大学）
張向栄（浙江大学）

序言

日本人自古就喜爱中国的古典书籍。例如，像《白氏文集》、杜甫、李白为主的唐宋诗文，《史记》、《汉书》、《三国志》之类的史书，《论语》、《孟子》、《老子》、《庄子》、《韩非子》、《墨子》之类的思想著作，或者像《水浒传》、《三国演义》、《搜神记》、《聊斋志异》、《列仙传》这样的史传与传奇小说之类等等，涉及范围广，领域多。而像《长恨歌传》、《杜子春》、《邯郸梦枕》等则是为日本人非常熟知的故事。现在日本高中的『国语』教科书中，汉诗文也与现代文、古文一起被予以采用。学生通过学习这些古诗文来学习『训读』方法，作为日文加以读解，并学习中国的古诗及熟语缘由的故实等。那是因为日语是在中国语广泛而又深刻的影响下形成的历史结果。

然而遗憾的是，中国人几乎不了解日本的古典，这可能是日语对以前的中国语影响力较低的缘故吧。不过，如果要深刻理解以日本人通常对事物的想法、人性以及以季节感为主的感性、美意识、处世观、人生观等，那么，接触日本古典文学是比什么都好的捷径，是不可欠缺的程序吧。从这种意义上说，实在令人惋惜的是，每年来日本的中国留学生诸君为数众多，可是其中不接触本书所选取的日本古典文学作品便回国的，却占压倒性多数。

在早稻田大学语学研究所以及日本语研究教育中心，我在以来自中国、韩国、马来西亚、印度尼西亚等国家的留学生为对象，教授《日本古典文学入门》课程的过程中，对此深有感触，那时就希望在不久的将来能在该中心制作《日本古典文学入门》教科书，但未能如愿。后来，我偶然同曾在早稻田大学研究生院文学研究科从我（专攻镰仓、室町时代文学）学习的刘瑞芝氏谈及这个愿望，得到了她的赞同。于是，我们决定日中专家合作编写一部载有中文译文的日本古典文学入门书，一部不仅留学生，而且中国大学的日语专业本

科生、研究生以及社会人士都可利用的教科书。书名定为《日本古典文学读本》，并就其编写问题进行规划。那是在一九九九年春天。

于是，翌年成立了以我为日本方面负责人，浙江大学刘瑞芝氏、北京大学潘金生氏为中国方面负责人的编辑委员会，就《日本古典文学读本》的组成部分、内容和结构进行了研究，并拟定了《日本古典文学读本》计划草案。这一计划得到了早稻田大学教育学部同事松本直树（专攻奈良时代文学）、津本信博（专攻平安时代文学）、中岛隆（专攻江户时代文学）以及日本语研究教育中心铃木义昭（专攻汉文学）诸氏的赞同与协助。此后，便开始了作品的编选、注释及现代语翻译工作。中国方面由刘瑞芝氏撰写作品简介，由潘金生氏编撰简明日本古典文学史年表，并且中方十几名专家对原作进行了翻译，对注释作了翻译和加工。

另一方面，刘瑞芝氏为本书的出版积极与当地浙江省的出版社洽商，得到了有关出版界人士的支持，决定了在浙江古籍出版社出版。本书的刊行，承蒙浙江古籍出版社及其总编辑徐忠良氏赐予极大的帮助。此外，收藏者中野幸一氏为本书提供了封面与封底的绘画。在此，允致深切的谢忱。

『山川异域，风月同天』，日中两国相关人士的心愿一致：在这里，在为本书的诞生而欣喜的同时，祈望本书有助于中国的日语及日本文学的教学，从而对日中文化交流有所裨益。

小林保治

二〇〇二年五月

序言

古来、日本人は中国の古典籍に親しんできた。『白氏文集』や杜甫や李白を初めとする唐宋詩文、『史記』や『漢書』や『三国志』のような史書、『論語』や『孟子』、老荘の書や『韓非子』や『墨子』のごとき思想書、或いは『水滸伝』や『三国志演義』、『捜神記』や『聊斎志異』『列仙伝』といった史伝や伝記物語の類等々、その範囲は広く、分野も多岐に渉っていた。「長恨歌伝」や「杜子春」や「邯鄲夢の枕」などもよく知られた話であった。現在も日本の高等学校の「国語」の教科書のなかには、現代文、古文とともに漢詩文が取り上げられている。生徒はそれらを「訓読する」方法を教わり、日本文として読解し、中国の古い詩や熟語のいわれとなった故実などを学んでいる。それは、日本語が中国語の広く深い影響のもとに形成されてきた歴史の結果である。

しかるに日本の古典は残念ながら中国の人にはほとんど知られていない。これは従来の中国語に対する日本語の影響力の低さの故ではあろうが、日本人全般のものの考え方や人間性、季節感を始めとする日本人の感性や美意識、処世観や人生観などを深く理解するためには、様々な日本の古典文学に接することが何よりの捷径であり、不可欠の手順であろう。その意味で、毎年日本へやってくる中国の留学生諸君の数は多いが、本書に取り上げたような日本の古典文学に出会うことなく帰国する人々が圧倒的に多いのは、誠に残念でならない。

早稲田大学語学研究所及び日本語研究教育センターで、中国・韓国・マレーシア・インドネシア等の国々から来た留学生を相手に「日本古典入門」の授業を担当しながら、そのことを痛感していた私は、近い将来、『日本古典文学入門』という教科書をこのセンターで作りたいと願っていたが、実現されないままになっていた。それがかつて早稲田大学大学院文学研究科の私（鎌倉・室町時代文学専攻）に学んだことのある劉瑞芝氏に話したところ

賛同してくれて、日中の専門家が協力して中国語訳を併載した入門書にすれば留学生ばかりでなく中国の大学の日本語専攻の大学生、大学院生、更に社会人にも利用されるような教科書ということになり、書名を『日本古典文学読本』と決めて、企画を進めることになった。それは一九九九年の春だった。

そこで、翌年から私が日本側の責任者となり、浙江大学劉瑞芝氏、北京大学潘金生氏が中国側の責任者となって編集委員会を作り、『日本古典文学読本』の構成や内容、機能などについて相談し、『日本古典文学読本』の草案を作成した。私は早稲田大学教育学部の同僚である松本直樹(奈良時代文学専攻)、津本信博(平安時代文学専攻)、中嶋隆(江戸時代文学専攻)と日本語研究教育センターの鈴木義昭(漢文学専攻)諸氏の賛同・協力を得て、作品の選定と注釈、現代語訳などの作成にとりかかり、中国側も劉瑞芝氏が作品の紹介、潘金生氏が日本古典文学史略年表を編集し、専門家十数人が原文、注釈の中国訳の作成を進めた。

その一方で、劉氏は本書の出版を実現するために地元の浙江省の出版社との折衝に努められ、出版社界の助力を得て浙江古籍出版社より刊行されることになった。本書の刊行に際し、同出版社の総編輯徐忠良氏には一方ならぬ御助力を賜った。また、表紙カバーの絵は所蔵者中野幸一氏のご高配による。ここに甚深なる謝意を表する。

最後に、「山川異域、風月同天」、日中両国の関係者の願望が一つになってここに本書が誕生したことを喜ぶとともに、本書が中国における日本語、日本文学の教学に寄与し、日中文化交流の一助となることを念ずる次第である。

小林保治

二〇〇二年五月

目次

序言……小林保治 1

◇上代（奈良時代）　松本直樹　選・訳

古事記……松本直樹・潘金生注釈

海さち彦と山さち彦……1

万葉集……松本直樹・劉瑞芝注釈

貧窮問答の歌一首……13

◇中古（平安時代）　津本信博・小林保治　選・訳

竹取物語……津本信博・張向栄注釈

竹取の翁とかぐや姫……18

石作の皇子と仏の御石の鉢……19

迎への天人来る……21

伊勢物語……津本信博・張向栄注釈

初冠……24

東下り……25

あやしき藤の花……26

古今和歌集……津本信博・劉瑞芝注釈

仮名序……30

六歌仙の歌……32

撰者らの歌……32

土佐日記……津本信博・王東輝注釈

門出……36

都に到着……37

蜻蛉日記……津本信博・劉瑞芝注釈

身の上を書き日記して……41

なげきつつ……42

鷹を握り放つ……43

落窪物語……津本信博・張向栄注釈

落窪の君の生い立ち……46

めでたきこと……47

枕草子……津本信博・卞立強注釈

春は……50

すこし春ある心地……51

和泉式部日記……津本信博・修魯彬注釈

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

為尊親王追慕と恋の芽生え……54
誰も憂き世……56
紫式部日記……津本信博・王東輝注釈
土御門殿のありさま……59
里居の物憂い心……60
清少納言の事……62
清少納言こそ……62
源氏物語……津本信博・張向栄注釈
桐壺更衣への帝のご寵愛……65
大和魂……67
八の宮の娘達……67
更級日記……津本信博・王東輝注釈
上洛の旅……71
源氏物語耽読……72
堤中納言物語……津本信博・張向栄注釈
虫めづる姫君……76
大鏡……津本信博・張向栄注釈
序文……80
菅原道眞の左遷――時平伝……82
今昔物語集……小林保治・潘金生注釈
信濃守藤原陳忠落入御坂語……86
◇中世（鎌倉・室町時代）　小林保治　選・訳
宇治拾遺物語……小林保治・劉瑞芝注釈
鬼に瘤取らるる事……94
伴大納言の事……100
三河入道、遁世の事……101
新古今和歌集……小林保治・劉瑞芝注釈
仮名序（抄）……108
春歌……110
秋歌……112
方丈記……小林保治・劉瑞芝注釈
ゆく河の流れ……117
安元の大火……118
養和の飢饉……120
平家物語……小林保治・江龍娣注釈
祇園精舎……128
敦盛最期……130
忠度最期……134
建礼門院右京大夫集……小林保治・張向栄注釈

今や夢　昔や夢と……141
古今著聞集……小林保治・于長敏注釈
源義家と安倍貞任……144
熟柿と弓取りの法師……145
母子猿の哀話……147
徒然草……小林保治・李銘敬注釈
花はさかりに……150
心なしと見ゆる者も……152
人間の営みあへるわざを見るに……154
年老いたる人の……154
さしたる事なくて人のがり行くは……155
達人の人を見る眼は……156
◇近世（江戸時代）　中嶋隆　選・訳
西鶴諸国ばなし……中嶋隆・張向栄注釈
大晦日は合はぬ算用……163
日本永代蔵……中嶋隆・劉瑞芝注釈
世界の借屋大将……171
世間胸算用……中嶋隆・孫力平注釈
小判は寝姿の夢……180
おくのほそ道……中嶋隆・劉瑞芝注釈
旅立ち……188
平泉……190
立石寺……191
去来抄……中嶋隆・楊永良注釈
此木戸や……194
雨月物語……中嶋隆・張向栄注釈
夢応の鯉魚……197
◇漢文入門……鈴木義昭編撰　204
◇中文参考译文
古事记……潘金生　译　225
万叶集……杨烈　译　227
竹取物语……张向荣　译　228
伊势物语……刘瑞芝　译　230
古今和歌集……杨烈　刘瑞芝　译　232
土佐日记……王东辉　译　234
蜻蛉日记……刘瑞芝　译　235

落窪物语……张向荣 译 237
枕草子……卞立强 译 238
和泉式部日记……修鲁彬 译 239
紫式部日记……王东辉 译 241
源氏物语……张向荣 译 243
更级日记……王东辉 译 245
堤中纳言物语……张向荣 译 246
大镜……张向荣 译 248
今昔物语集……潘金生 译 249
宇治拾遗物语……刘瑞芝 译 252
新古今和歌集……罗兴典 译 255
方丈记……刘瑞芝 译 258
平家物语……江龙娣 译 261
建礼门院右京大夫集……张向荣 译 264
古今著闻集……于长敏 译 265
徒然草……李铭敬 译 267
西鹤诸国怪谈奇闻……张向荣 译 270
日本永代藏……钱稻孙 译 272
世事费心机……孙力平 译 275
奥州小道……刘瑞芝 译 277
去来抄……杨永良 译 279
雨月物语……阎小妹 译 280
汉文入门……刘瑞芝 译 282
附录
一 切据《延喜式》推算上京城和去国司衙门的日数……284
二 平安京图……285
三 宫殿全图……286
四 简明日本古典文学史年表……287
跋……刘瑞芝 潘金生 289

古事记

日本现存最早的一部神话、传说和历史著作。由太安万侣（？—七二三，奈良时代文人、官吏）于和铜五年（七一二）奉元明天皇敕命，在舍人稗田阿礼口述《帝纪》和《本辞》的基础上编撰而成，旨在发扬『邦家之经纬，王化之鸿基』，以垂教于后世。本书分上、中、下三卷，上卷列为神代，中、下卷列为各天皇纪，内容包括日本古代神话、传说、歌谣、历史故事与帝王家谱等。序文为纯粹的四六骈体汉文，正文为变体汉文，而歌谣则用『万叶假名』书写。本书既反映了日本民族在摇篮时期的性格与思想，亦显示出日本民族丰富的想象力和艺术创造力，对后世的文学、思想、艺术、史学、语言等均有巨大的影响。

古事記

一 海さち彦と山さち彦

二 かれ、火照三命は四海さち彦として五鰭の広物、鰭の狭物を取り、六火遠理七命は山さち彦として八毛の麁物、毛の柔物を取らしき。しかして、火遠理命、その兄火照九命に謂はく、「各さちを相易へて用ゐむと欲ふ」といひて、三度乞はししかども許さず。しかれども遂にわづかに相易ふること得たり。しかして、火遠理命、海

古事記

海さち彦と山さち彦

さて、火照命は、海さち彦として大きな魚、小さな魚をとり、火遠理命は、山さち彦として毛の粗い獣や毛の柔らかい獣をとって暮らしていらっしゃった。そしてある時、火遠理命がその兄の火照命に「それぞれの山さち、海さちのこもった道具を取り替えて使ってみたい」と言って、三度願い出てみたが、兄は許さなかった。しかしながら、最後にやっと交換することができた。そこで火遠理命は、海さちの

さちを以て魚釣らすに、かつて一〇一つの魚だにも得ず、また、その鉤一一を海に失ひたまひき。ここに、その兄火照命、その鉤を乞ひて曰ひしく、「山さちも己がさちさち、海さちも己がさちさち、今は各さち返さむと謂ふ」といひし時に、その弟火遠理命、答へて曰らししく、「汝が鉤は、魚釣りしに、一つの魚も得ずして、遂に海に失ひき」とのらしき。しかれども、その兄、強ちに乞ひ徵りき。かれ、その弟、御佩かせる十拳剣一三を破り、五百鉤を作り償ひたまへども、取らず。また、一千鉤を作り償ひたまへども、受けずして、「なほその正本一四の鉤を得むと欲ふ」と云ひき。

ここに、その弟、泣き患へて、海辺に居ししに、塩椎神来て問ひて曰ひしく、「何ぞ、虚空津日高一六の泣き患へたまふ所由は」といひき。答へて言らししく、「我と兄と鉤を易へて、その鉤を失ひ

釣り針で魚を釣ってみたが、全く一匹の魚も釣れず、またその釣り針を海に失ってしまわれた。そこへ、その兄、火照命がその釣り針を求めて、「山のさちも自分のさちある道具、海のさちも自分のさちある道具でないと…。今はそれぞれのさちある道具を返そうと思う」と言ってきたので、弟の火遠理命は答えて、「あなたの釣り針は、魚を釣ってみたが一匹の魚もとれないで、とうとう海でなくしてしまいました」とおっしゃった。しかし、その兄は、釣り針を返すようにと強く責めたてた。それで、その弟は身につけておられた十拳の剣を鋳直して五百の釣り針を作って償ったが、兄は受け取らず、また千もの釣り針を作って償っても受け取らないで、「やはり、正眞正銘のもとの釣り針が欲しい」と言った。

そこで、その弟が、泣き嘆いて、海辺にいた時、塩椎神がやって来て、「どういうわけで、虚空津日高が泣き嘆いていらっしゃるのですか」と尋ねた。火遠理命は答えて「私と兄とでお互いの釣り針などを交換して、私が兄の釣り針を海になくしてしまいました。そうしたら兄がその釣り針を返せと責めるので、私は

き。ここに、その鉤を乞ふ故に、多たの鉤を償へども受けずして、『なほその本の鉤を得むと欲ふ』と云ひき。かれ、泣き患ふるぞ」といひき。しかして、塩椎神の云ひしく、「我、汝命の為に善き議を作さむ」といひて、即ち無間勝間の小船を造り、その船に載せて、教へて曰ひしく、「我その船を押し流さば、差暫し往でませ。味し御路あらむ。乃ちその道に乗りて往でましなば、魚鱗の如く造れる宮室、其れ綿津見神の宮ぞ。その神の御門に到りましなば、傍の井の上に湯津香木あらむ。かれ、その木の上に坐さば、その海神の女、見て相議らむぞ」といひき。（香木を訓みて加都良と云ふ。木なり）

かれ、教の随に少し行でましに、備さにその言の如し。即ち、その香木に登りて坐しき。しかして、海神の女、豊玉毘売の

たくさんの釣り針を償ったのですが、兄はそれを受け取らず、「やはり、もとの釣り針が欲しい」と言いました。それで泣き嘆いているのです」と言った。すると塩椎神は「私があなた様のためによい手立てを考えましょう」と言って、さっそく目の無い竹籠の小船を作って、火遠理命をその船に載せ、「私がこの船を押し流しますので、しばらくの間、そのまま乗って行ってください。よい潮路があるでしょう。そしてそのままその潮路に乗って行かれますと、魚の鱗のように並んだたくさんの御殿があるでしょう。そこが綿津見神の宮です。その神の宮の御門のところにいらっしゃったら、傍らの井戸のほとりに神聖な香木の木があるでしょう。そして、その木の上にいらっしゃれば、その海神の娘があなたを見つけて相談にのってくれるでしょう」と言った。（香木をカツラと読む。木のことである）

そこで、火遠理命が、教えのとおりに少しの間船で行かれたところ、すべてその言葉のとおりであった。それで、その香木の木に登って座っておられた。そして、海神の娘の豊玉毘売の下女が、玉のように美しい器を持って水を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com